

齋藤 栄 *Sakae Saitō*

殺人太平記



中公文庫



中公文庫

さつじん たいへい き
殺人太平記

定価はカバーに表示してあります。

1998年 9 月 3 日印刷

1998年 9 月18日発行

著 者 さいとう 齋藤 さかえ 栄

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Sakae Saito

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷

ISBN4-12-203234-2 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

殺人太平記

斎藤 栄



中央公論社

目次

第一章	蛇になる予感	7
第二章	K C C	32
第三章	箱根別荘	56
第四章	双葉由華	81
第五章	バサラの女 ^{ひと}	106
第六章	太平記論	131
第七章	土牢	157
第八章	政民党	182

第九章 大乘寺和也

第十章 悪のトリオ

第十一章 みなとがわ湊川の戦死

第十二章 殺人者の苦悩

解説

影山 莊一

305

281

257

232

206

殺人太平記

第一章 蛇になる予感

1

その日の朝刊には、鎌倉山の桜が満開になったという記事が載っていた。

二階堂日美子^{にかいどうひみこ}は、鎌倉・材木座の家で、久しぶりの落着いた日々を過ごしていた。

神戸に転居している二階堂警視と日美子は、さる一月十七日の阪神大震災のために、マシオン^{マシオン}ヘリクス六甲^{ろくが}の十二階の住居が、大被害を受けてしまった。

特に、日美子が鎌倉から運んだ、毎日の生活に必要な、陶器、ガラス器はいうに及ばず、父や母の思い出の品々を、ほとんど破壊されたのである。

二階堂は、震災後の治安維持のために、ほとんど自宅へもどることなく働き、日美子もボランティアとして、東灘区^{ひがしなだ}内の避難センターを廻った。

それが一段落したところで、神戸から鎌倉へ戻り、数日をかけて、神戸へ送るガラス食器や陶器を取りまとめるつもりだった。

二階堂は、

「おまえがガラス器や陶器の好きなのはわかっていんだけど、これからは漆器を中心にまとめたら……」

と、彼女に言った。

「わかっていゝるわ。亡母^{はは}の好きだった鎌倉彫のものは、二、三点、残っているの。それを持っていくつもりよ。でも、陶器の手ざわりはいいし、夏はどうしても、ガラスの器^{うつわ}が欲しいわ」

日美子は、二階堂に言った手前、ガラス器、陶器、漆器を、すべて収納庫から出して、いろいろとチェックしてみた。

こういう作業は、途中、ぼんやりと、その器に関する思い出にひたってしまい、つい、時間が経ってしまふ。

へああ、いけないわ。もっと手早く片付けないと……
と、思った。

今頃は、被災地でも、桜が咲いているに違いない。日美子は、美しい神戸の桜のことを

回想した。

特に、日美子が好きだったのは、しゆくがわ夙川堤の桜だった。毎年、四月になると、すぐに咲いた。川沿いの散策の道には、美しい花の帯ができるのだ。

王子公園の桜も、道路の上の方から見おろす俯瞰ふかんが、まるで錦絵のように見えたのを思い出す。

須磨もいい。有馬温泉の桜も雰囲気があった。

へでも……いまだに多くの被災者の人が、避難センターで、辛い生活を送っていらっしやるんだわ……

と、日美子は胸を痛めた。

この鎌倉市では、市が呼びかけて、市民に阪神大震災の被災者のホームステイを実行している。

へ私も、何か、こっちでお手伝いできることがあったら……

と、日美子は思った。

しかし、彼女はいつまでも、この兄の家にとどまっていることはできない。再び、神戸に帰って、ボランティア活動をするつもりなのだった。自分達も被災者だが、ヘリンクス六甲が倒れなかったことを幸運だと思っていた。

戸棚の奥から、亡父ちちの手焼きの壺が出てきた。

へそうだわ。これをひとつ、持って行くことにしましょう」

と、日美子が思ったとき、電話のベルが鳴った。

2

電話をかけてきたのは、日美子の学生時代からの友人、双葉由華ふたば ゆかだった。

「ああ、よかった。あなた、やっぱりこっちにいたのね」

と、由華は言った。

「違うのよ。昨日、鎌倉に戻って来たの」

日美子は応こたえた。

「そう?…… 神戸へ電話をしても、全然、つながらないでしょ。呼び出し音はしていても、それだけで……」

「それはね。うちの主人ひとは、ずーっと、お仕事で、県警本部へ行っちゃって、お風呂にもはいらない恰好かつこうのまま、働いていたし……私も、朝早くから夜遅くまで、ボランティアしていたから……」

と、日美子は言った。

「じゃ、あなたは被災しなかったの?」

「とんでもないわ。うちのマンションも、これから大修理するのよ。その修理費のことで、管理組合が大騒動になっているわ」

「でも、お二人とも、怪我はしなかった?」

「それはね……幸運だったの」

「よかったわ。……じゃ、あなた、相談にのってくれるでしょう?」

「相談てなあに?」

と、日美子が訊いた。

「会って、直接、お話したいわ。今、あなた、何しているの?」

と、由華が訊いた。

「神戸の家財が、滅茶滅茶になったので、少し、こっちのお茶碗とか食器類を持って行くための準備よ」

「被災のあと、そういうものは、どうしていたの?」

「なんといっても、お水が出ないから、使い捨ての紙コップ、紙皿というものを利用して」

「それでは大変でしょう？」

「まあね。このところ三キロくらいは瘦やせたの。お食事は二食にしてみましたし……」

「本当？」

「でも、贅ぜいたく沢は言えないわ。お年寄りには、避難所にいるだけで、病気になって、お亡くなりになった人も多いの」

「テレビや新聞で知っているわ」

「そのお話も、会ってからするけど……とにかく、今は丁度いい時間。とにかく、いらっしやいよ」

と、日美子は言った。

「ご迷惑かもしれないけど、これからすぐに行くわ。三十分くらいしたら、着くと思うけど……」

と、そこで由華は、電話を切った。

由華が訪ねてくるというので、日美子は、陶漆器の類を、その場に出したまま、ダイニングキッチンの方へ移った。

日美子は、久しぶりに会う親友の由華のことを思って、心の暖かくなるのを感じた。

由華の父親は、双葉正太郎しやうたろうという衆議院議員である。一カ月前、新日本党の幹事長に

なったというニュースを、テレビで知ったが、日美子も五年くらい前に会っている。温厚な人だ。

由華は、学生時代、日美子の妹みたいで、仲よくしていた。

なにしろ、日美子がタロット占いの占者として、学生時代から活躍していたとき、その助手みたいな役もしてくれた。

「相談というのは、なんだろう?……」

と、日美子は思った。

タロット占いをしてほしい、というのであれば、〈相談〉という言葉は使わないだろうと考えた。

しかし、何かの悩みがあることだけは、間違いない。

日美子は、この一月十七日から、ずーっと、神戸にいたから、占い関係の仕事は、一切していない。

相談にのることといったら、毛布や水、食糧の手当、医療関係者との連絡などが主だった。夫が警察官であるのも利用して、積極的に働き廻ってきたのである。

だから、由華の相談というのは、三ヵ月ぶりの、一般的な話になるわけだった。

日美子は、深い溜息をついた。

今度の大地震のあと、師の大貫朋齋おおぬきほうさいが箱根湯本から電話をしてきた。愛弟子の安否を氣遣つてに違いない。

「先生。私は元氣でありますわ」

と、日美子は、こた応えた。

すると、朋齋のしわが唖れた声が、叱るように言った。

「それはわかつておる。わしが心配しているのは、そっちの震度は8だと思ふのに、氣象庁が7だと発表したことじゃ。実際にどうだった？」

日美子はそのとき、正直に、

「はい。おっしゃるように、震度は8だったと思います」
と応えた。

すると、朋齋は笑った。

「うん。わしの思った通りじゃった」

それだけの会話だったが、すべてを見通したような朋齋のすこ凄さに、日美子はあらためて恐れを懷いだいたのである。

3

約束通り、三十分したら、由華が運転する車は、材木座の家に着いた。
由華は手土産に、

「あなた達、仲のいいご夫婦だから、どうしても、これを買ってしまおうのよ」と、鎌倉駅前の名物へ夫婦まんじゅう^{めおと}を持ってきた。

「ありがとう。でも、私……このところ、ほとんど、うちの主人^{ひと}に会っていないの」
日美子は、少し淋しそうに言った。

「お仕事のために？」

「そう。千年に一回というほどの、大地震が神戸に起きたんですもの。警察はもう滅茶滅茶に忙しいのよ」

「じゃ、あなたもお忙しいんでしょ？」

「うん。私は、しばらく、ここにいますつもりよ。主人にも了解してもらってあるの」
「何か？」

「ああいうことがあると、身の記録のために、どうしても、カメラを自由に扱えないと